

解題

戸川芳郎

倉石武四郎先生の著作は、その講義ノート類をふくめ、先生の収集された貴重な蔵書とともに、現在、東大東洋文化研究所に保存されている。

倉石先生は、一九七五昭和五十年十一月、七十八歳で亡くなつた。一八九七明治三十年の生まれであつて、わかい世代の読者には、『岩波中国語辞典』の著者というほかに、すでに馴染みがうすいかも知れない。そこで、まずは先生の経歴を書ききつてしまおこう。「倉石武四郎博士伝略」(『倉石博士著述目録』附、『中国語学』一一六、一九七九・一一、中国語学会)には、いう。

倉石武四郎博士は、新潟県高田町において明治三十年(一八九七)九月二十一日に誕生した。倉石氏は高田の名家で、和漢の学に精しい人物を出し、たとえば侗齋先生(譯、典太)は安積良齋に学び、高田藩校の教授を勤めた。父昌吉氏は慶応義塾で福沢諭吉の教えを受け、のち郷里で商業を営み、昭和五年に死去し、母みか刀自は国文学を嗜み和歌を作ったが、昭和三十年になくなつた。兄弟すべて十三人(四人は早逝)のうち第七子で、四男にあたる。

八歳のとき高田第一尋常小学校に入り、十四歳で県立高田中学校に進み、大正四年卒業、同年第一高等学校一部乙類に入学。中学のころから和漢の古典を好み、一高在学中から中国文学を志し、大正七年東京帝国大学文学部入学、支那文学科を専攻、卒業論文は「恒星管窓」。大正十年（一九一二）卒業とともに、中国の芝罘・上海・蘇州・南京・鎮江・揚州・杭州・紹興・寧波等に一ヶ月旅行し、また特選給費生として文学部副手を兼ね、大正十一年、進んで京都帝国大学大学院に転じ、主として狩野直喜博士の指導を受けた。また新城新藏博士の指導で中国古典の天文史料を集めめた。大正十三年、大谷大学文学部に助教授として出講（支那文学史等を講述）、また京都帝国大学附設第七臨時教員養成所の講師となり、この間、豊子夫人と結婚（四男二女を儲ける）。大正十五年、京都帝国大学専任講師、翌昭和二年四月、助教授に任命され、大正十五年から「支那学」誌の編輯、のち「狩野教授遷歴記念支那学論叢」（弘文堂書房、昭三刊）の編纂に当った。

昭和三年（一九二八）三月、文部省在外研究員として北京に駐在、はじめ東城の延英舎に寓し、吉川幸次郎氏と同宿、のち西城の孫人和氏宅に移り、北京大学・師範大学・中国大学に聽講（吳承仕・錢玄同・孫人和・馬裕藻・朱希祖ら諸氏の講義あり）、また雪橋講舍（楊鍾羲氏）において掌故を修め、北京滞在中の胡適・周樹人（魯迅）ら諸氏に会見、また山西（太原・臨汾・洪洞・曲沃・翼城・大交・聞喜など）に遊び、また別に、東方文化学院京都研究所のために書籍（天津の陶湘氏の叢書）購入に尽力（これによって同所所蔵の漢籍中、叢書の部の基幹が形成された）。のち狩野直喜所長の下において、同所漢籍目録・同分類目録が編纂されたが、このことにも参与した、その後、昭和五年六月に至り、北京を離れて上海に遊び（章炳麟氏を訪問）、かねて無錫・常州・南京（黃侃氏を訪問、八千巻楼の書籍を閲覧）を巡ったが、病いのため旅行を中止し、その八月、帰国した。

帰国後、京都帝国大学において清朝詩学・清朝音学などを講ずるほか、魯迅（呐喊）などを講説、また中國語教育を推進、多くの教科書を著わした。昭和十四年に至り、学位請求論文「段懋堂の音学」によって文学

博士の学位を受け、同年（一九三九）四月、京都帝国大学教授に任じ、東京帝国大学講師として出講、翌十五年からは東京帝国大学教授を兼ねた。

これより先、昭和六年より東方文化学院京都研究所の研究員を兼ね、研究「礼疏校讌」のもとに儀礼疏の校定を行い、昭和十二年一月「儀礼疏攷正」を完成、研究所に報告した。また同所經學文学研究室主任としては、尚書正義校定の事業を始め、のちに主任を退いたが、そのための会議には常に参加した。

さて東西両大学兼任のころ、國語審議委員等を依頼され、昭和十八・十九・二十年には有栖川宮爵学資金を受け（高田久彦氏と共に）、「現代景語の研究」を行なつた。また戦後は東京大学理工学研究所の小幡重二博士とともに、同所の施設によって中国語諸方言の実験的研究を開始、一方では近畿一帯の古寺院に伝わる仏典誦誦方法から唐代古声調を探究した。中国語学会（現、中国語学会）を結成したのは、昭和二十一年（一九四六）十月である。結成以来、終始その会長に在任（昭和五十年十月まで）した。

昭和二十四年（一九四九）五月、東京大学教授専任として東京に移り、また日本学術會議の第一期会員に当選、日本中国学会結成の事に参与。二十五年からは中国語講習会を主宰（二十五年は日中友好協会の名により、翌年より博士個人の倉石中国語講習会となり、会長として昭和四十二年九月の解散にまで及ぶ）、初めてラテン化新文字を教育に応用、二十八年からはNHK第一放送の中国語入門講座を担当（三十一年に及ぶ）。一十九年（一九五四）秋、中国学術文化觀察団の一員として新中国（北京・西安・上海・杭州・廣東）を見学した。この間、東京大学文学部に「中国の文化と社会に関する諸問題」の綜合講義を開き（二十五年以降）、また「中国の変革期における社会・経済・文化の相関関係の研究」委員会（二十六年以降、文部省科学研究所による）を主宰、かたわらその言語文字問題の研究を担当、また、北方語研究会を結んで人民文化叢書の方言を摘出・研究、また別に「ラテン化新文字による中国語辞典」を編纂・出版した（七分冊、昭和三十三年完刊）。

昭和三十三年（一九五八）三月、東京大学教授を定年退官し、その名誉教授となつたのち、京都大学名誉教授をも追承。一方、昭和三十年六月より「中国語」誌を発刊（現在に及ぶ）、中国語の普及につとめ、引きつづき新たに制定された漢語拼音方案による中国語辞典の編纂に全力を傾注し、昭和三十八年九月、「岩波中国語辞典」を公刊するに至つた。この間、昭和三十五年春、中国の文字改革検察のため、日本学術代表団として中国を訪問した。

昭和三十九年（一九六四）十月、小石川の善隣学生会館に中国語専修学校「日中学院」を設立し、終身その学院長として、教育と經營に力を尽くした。みずから中国語初級・中級を担当し、その教科書「中国語のくみたて」などを編み、かたわら学院の講師のために語学概説を書き、ながく段玉裁「說文解字注」を講じた。また、学校經營に伴う種々の困難に際し、身をもつて事に当たり、倉石中国語講習会が昭和四十二年の善隣学生会館事件のあと、同年九月解散のやむなきに至つたが、「日中学院別科」としてその学習の場を存続させ、各方面の支持を得た。

昭和四十九年、「中国語の研究と教育および辞典の編纂」により朝日文化賞を受賞したが、その前後より痛風と脳血栓をわずらい、同年九月東京都養育院附属病院に入院、翌五十年（一九七〇）十一月十四日、重次の脳血栓のすえ逝去した。享年、七十九歳。豊子夫人は、昭和五十三年六月五日、博士と同じ病院でなくなつた。七十五歳。夫妻とも、上越市高田の本誓寺内、円福寺に葬られる。

博士は、中国の古典に深い造詣をもち、ことに清朝小学、清代に発達した古代中国語研究について、西欧近代言語学の方法を加えて検討する新しい研究法を開拓した。その一方、現代中国語について、諸方言に至るまで綿密な調査と研究を進め、その基礎の上に中国語教育に独自の方法を樹立しようと目ざした。また、各種の語学辞典と教科書の編纂を企て、その一部を完成し、進んで中国語専修の学校を創設して中国語の普及と向上

に、後半生を捧げた。

かつて中国語文献は、現代中国語のものはその語音で読み、古典文には返り点・送りがなを附していわゆる漢文訓読を行なうのが通例であったが、博士の信念は、訓読法を一切排除し、古典語も現代語もひとしく中国語音によって中国語として読解することにあつた。その努力により、上古から現代に至る中国語文献は、すべて外国語である中国語として読み、かつ理解する方法が確立され、中国文学を外国文学として研究する態度を我が国に定着させた。同時に、従来とかく通商などの実用面に偏つていた現代中国語に対する研究と教育に、学問的な検討を加えた。

博士の著名な蔵書は、現在すべて移って東京大学東洋文化研究所にある。いま「倉石文庫」として整理中である。

1979.9.21.（賴惟勤・戸川芳郎）

この経験とともに、倉石武四郎先生の著述一覧のあらましを示しておかなければならない。が、それは、本『著作集 第二巻』に「論著目録」として附載されることになつてゐるので、著作物の全体については、どうかそれによつて通観せられたい。

先生は、一九五八昭和三十三年、東大を定年で退職のち、東京都立大に一、一度、出講されたほかは大学の講壇から離れ、中日辞典の編纂に力をついやされ、一方、自家経営の「倉石中国語講習会」をひきつづき主宰し、さらにそこから発展した中国語専修の「日中学院」を開設して、わが国の中国語の普及とその水準の向上に尽くされたのである。

さきの「伝略」で知られるように、学究としての先生は、東大の定年退官までの二十五年間、その前半は京都大学、後半は東京大学とに分かれるが、中間の十年ほどその両大学の兼任教授として、敗戦の混乱期をはさんで京都と東京とを往復された。

京都大学での研究は、講義ノート「清朝許学、清朝音学」および学位論文「段懋堂の音学」に代表される、清朝小学の紹介と評価、つまり一七、八世紀清代より発達しきたった古代漢語の史的研究の方法を概述し、その成果の整理と応用をおこなつたことにおいて、その独特的業績が認められる。また同時に、京大での最終講義「中國目録学」や東方文化学院での研究報告「儀礼疏攷正」にみられるような、伝統的な中国古典学のうえに立つた、すぐれた著作がこされた。

それは、清朝考拠の学、民国でいう「国学」、本邦では支那学と称して、その名は戦前の、京大出身者が拠つた同人研究誌『支那学』を通じてひろく知られていた。先生にじん唱道されたそれらの学問の特徴は、目録・輯佚・校勘の学にみられる中国文献学と、文字・音韻・訓詁の学を総合する清朝小学とをその基礎にすえた、史的実証を重んずる学術をさし、その方法をもって中国古典学の堅実なあり方として尊重されているものである。

先生の講義ノートのたぐいは、このたび整理のついた部分から刊行する予定にしていたが、都合によって次の機会にまわさざるを得なくなつた。しかしながら、幸いにも中国文献学に関する基礎知識の書『目録学』と、『儀礼疏攷正』五十巻とは、すでに東大東洋文化研究所の東洋学文献センター叢刊として公刊されている。目録学とは、中国歴代の書籍目録を考察しそれを通じて究明されうる、学術沿革の歴史を論ずる学問である。著書『儀礼疏攷正』は、唐の賈公彥が集成した『儀礼疏』、つまり經典『儀礼』に対する義疏、五十巻、それへの倉石先生の「攷正」すなわち校勘記であつて、隋唐『儀礼』解釈集の全巻をとりあげて本文を校訂した記録、言わば先生の精審な読書の業績にはからない。現に両書ともとも、中国研究の専家必備の書となつてゐる。

ただ、この際、さらに中国文献学に関する、先生の論考「解題」一篇を、ここに掲載しておこう。一つは、「東洋文庫藏中原本古文尚書卷第六跋」(『漢学会雑誌』第八卷第一号、一九四〇・七、東大支那文庫研究室)、他一つは、「毛詩抄(詩經)緒言」(『毛詩抄』(清原宣賢講述、倉石武四郎・小川環樹校訂、「岩波文庫」、一九四〇・三)である。

東洋文庫藏中原本古文尚書卷第六跋

右謙古定尚書孔氏傳卷第六。泰誓牧誓武成凡五篇。元德二年七月縫殿權助中原康隆手寫。子權大外記重貞加點。末有曾孫康富應永廿七年識語。每行經傳均十三字。舊藏澤伯爵家。今歸東洋文庫。案予所見中原本尚書又有東寺所藏卷十一。古梓堂文庫所藏卷十三皆係元亨三年左衛門權佐藤原長賴所鈔。後列中廣師弘師種師國師夏師利名記。審其款式乃與此不類。顯然別本。至謙古定本之存此卷者尚有英國博物館藏敦煌本。泰缺。泰誓上及神田鬯藏唐鈔本。後半缺。武成內野故亭舊藏鈔本。神宮文庫藏鈔本。足利學校藏鈔本。夙播藝林鬱爲世寶。昔大正乙卯吾師內藤博士作神田本跋。具論諸本之得失。如示諸掌。而此獨見遺。蓋時未大顯耳。今以諸鈔本並岳本注疏本。與此對勘。互有出入。泰誓上傳。我與諸侯觀紂政之善惡。我上無故字。爲立君以正之。正不作政。泰誓中傳。流行毒虐於下國万民。有行字。以兵誅必克之。占誅下無紂字。則能長世以安。安下無民字。牧誓傳。則其於汝身有戮矣。有其字。武成傳。一月周正月。周下無之字。其其四月也。重其字。尊其祖故稱先王。有其字。告天社山川之辭。社不作地。天下罪人亡逃者。亡逃二字不倒。此謂十一年會於孟津時。津下無還字。前人倒戈。人不作徒。必任能士。士不作事。所重在民人及五帝常之教。有民人二字。是其與敦煌本神田本内野本神宮本合者也。武成傳。大當王命。王不作天。是其與敦煌本内野本神宮本合者也。泰誓下傳。言酷虐之甚。有言字。牧誓所介弗弱。所介二字不倒。傳婦知外事。婦下無人字。武成傳。流血漂

春杵。流血二字不倒。皆武王所以反紂政。有所以二字。是其與神田本内野本神宮本合者也。泰誓中傳。夫子將士子下無謂字。是其與神田本合者也。泰誓中傳。故曰力行無度。有無度二字。鯀背之老。老不作者。泰誓下傳。我之無善之所以致。有所字。牧誓傳。示有事於敎令。有令字。理事三卿。理不作治。武成傳。九年而文王卒。有文王二字。筐篚其絲帛。筐下無盛字。是其與內野本神宮本合者也。泰誓下時厥明。明下無日字。傳。明著岐周。作周字。是其與敦煌本神田本及岳本合者也。泰誓中予有卒臣十人。有臣字。武成傳。惟婦言是用。有是字。是其與敦煌本內野本神宮本及岳本合者也。泰誓上傳。渡津乃作。下渡下無孟字。言暴虐。虐下無甚也二字。言天除惡樹善與民同。同下無欲也二字。泰誓中傳。凶人亦渴日以行惡。行不作爲。使下退桀命。桀上無夏字。伐之則克矣。伐上無以字。是其與神田本及岳本合者也。泰誓上傳。侈謂服飾過制。服不作采。泰誓中傳。言紂至親雖多。有言字。牧誓古人有言曰。有曰字。武成傳。始生明月三日。始下無月字。王季續統其業。業不作功。亦不作緒。致商之罪。有之字。以絕亂路。有以字。渡民危害。渡下無我庶二字。是其與內野本神宮本及岳本合者也。泰誓中傳。民皆呼天告冤。無事。有冤字。民之所惡者天誅之。有者字。泰誓下。今商王受狎侮五常。有今字。傳。明不可不誅。誅不作討。牧誓傳。旅衆也。衆大夫有也。衆二字。武成傳。前人倒戈自攻於後。以北走。有倒戈二字。北字。動有成功。有功字。伯七十里。七上無方字。是其與岳本注疏本合。而與各鈔本不同者也。蓋其時市舶始通。頗傳宋本。參互鉤稽。釋善而從。至其師師相承舊解。故不敢易耳。卽所用謙古字。雖視敦煌神田二本爲寡。而與內野本可相伯仲。其紙背行間。最錄釋文正義。亦有與今本異者。如泰誓上。劄字口孤反。今本孤作胡。泰誓中。劄字似俊反。今本似作以。酬字况付反。今本付作具。至於泰誓上。侈尺氏反。泰誓下。巧如字。又苦孝反。迺徒歷反。皆今本所無。或卽陸氏佚文。未可知也。其引正義泰誓上。天無二日。土无二王。土字單疏本作上。十行本作王。於是孟地置津謂之孟津。單疏十行均無是字。祇八行本與

此相應。則所依用之本。隱然可知。行間又有蔡云二條。於卒臣十人下。引劉侍讀說。蓋亦蔡傳文。以書富日記。卽此卷末康富所云淨居庵。講談義者是也。良賢以明經世家。兼採宋儒。自云永和中曾進講陳澧禮記集說。足利學校藏。然則此卷之三引蔡傳。疑出良賢說耳。良賢五世孫曰宣賢。此卷於百餘年前。已遭先略。泊德川氏開府。遂易漢而宋。師承淪替。家法蕩然。使謙古經傳。沉鬱於若此。有若無之間。履霜堅冰。有由來矣。今逢國家敦崇學術。山巖屋壁。盡騰厥祕。舊鈔古軼。日出不窮。發潛闡幽。惟斯時爲盛。學者讀此卷。庶於文物顯晦。世運升降之故。有所考證焉。昭和十二年十一月。

右は、元徳二年（一三三〇）に中原康隆の筆写した紙本墨書「古文尚書卷六」（沢宣武旧蔵）が、昭和十四年（一九三九年九月、東京、東洋文庫から景印複製されたおりの、附録の冊子「解説」中に、「考証」と題して印刷し配布されたものの、転載である。「」内の文字は、筆者戸川がこのたび補つたもの。

けたのは、今を去る数年前、私が東方文化学院京都研究所に於て、畏友吉川幸次郎君等と、始めて尚書正義校訂の事業に手を染めた頃であった。勿論この交渉も私たちの企てた事業に因んだものに相違ない。しかし詩経書經の国語の如きは、私たちの考る翻訳としてならば、ほとんど全生涯を賭すべき大事業であり、暇の乏しい私たちにとって到底負担してゆく見込みが立ないので、折角ながら辞退した。ただ当時私たちは正義校訂に必要な資料を蒐集していた関係から、清原宣實の毛詩抄・尚書抄が世に広く伝わらず、其の利用も容易でないことを懲としていたので、もしもこの一つの抄物を校訂出版することにして貰えるなら、そのお世話ぐらいの事は奉仕できようと云うことを言い添えておいた。勿論、文庫に収められた他の支那の古典に比べて全く趣が違うわけでもあり、その実現は覚束なかろうとも考えていた。

然るに其の後改めて毛詩抄・尚書抄の校訂を依頼されたので、吉川君とも協議の上、原本が概ね京都帝国大学附属図書館に所蔵されている関係もあり、主として私が交渉の事にあたり、実際の校訂は文学士小川環樹・高馬三良の両君に委任した。今その毛詩抄の首冊が刊行されるに当つて、小川君は東北帝国大学にあり、高馬君は兵庫県に赴任し、結局、校正の際の最後の疑問は、私が一々原本と対校して決定することになつてしまつた。もつとも校訂者の一人として私の名を掲げることまで承知した以上、これ位のことは当然といえば当然なことである。

それに解題を書くことは殆んど最初からの約束でもあるので、校正の筆を洗うに先だつて、校訂用の手びかえを整理して備忘の用に供する。

(注) 現在ここで用いられたのと同一の、古活字版「毛詩抄」二十巻、十三冊、が、中田祝夫編「抄物大系」の一つとして、外山映次氏の「解説」を附して、景印刊行されている。(勉誠社、上一九七一・八、下一九七一・一) —戸川權。

二

支那で詩という言葉は、一般に韻文の通称として使用されているが、此に云う「詩」は、支那に於ける最古の詩集——闕壁に始まり殷武に終るすべて三百五篇を含む——をさしている。此の詩集は、他の同類の書物に比べて、飛びぬけて古かつたので、ただ「詩」とさえ云えば此の書物をさすことは誰にも了解されていたらしい。それはちょうど此の書物と同じ位に古いと云われている文集——魏晉より秦晉に至る——を一層古い言葉で「書」と云つていたのと同様な関係である。

この「詩」は風・雅・頌の三部に大別され、風は更に周南・召南・郷・鄘・衛・王・鄭・齊・魏・唐・秦・陳・檜・曹・幽の十五国風に、雅は小雅・大雅に、頌は周頌・魯頌・商頌にそれぞれ分けられる。十五国風とは、それらの国々のお国ぶりであつて、風化という様な意味で風の文字が用いられたと云う。雅とは当時の王朝である周の朝廷に於て歌われたもので、雅正といふ様な意味を示している。頌に至つては神々を祭るとさの音楽で、頌の字は容と音が近いから、盛徳来形容したものであると云うのが、昔からの説であるが、舞容を伴つた神樂であると云う説も相当面白い。

三百篇の詩が作られた時代は、もし商頌が本当に殷の時の歌だとすれば、殷から始まつて東周の惠王・襄王または定王ぐらいうまでの長い期間に亘るわけになるが、商頌とは云え、殷の子孫が周代に作ったものであろうと云う説もあつて、大体間の中葉あたりから前後に亘がつてゐるかの様に想われる。論語の中にも「詩三百」と云う説もあつて、大体間の中葉あたりから前後に亘がつてゐるかの様に想われる。論語の中にも「詩三百」と云う言葉が極く自然に使われている所を見ると、孔子の頃には今の「詩」と大体同様な編纂もできていたらしい。史記などには、「詩が三千首あまりもあつたのを、孔子が道徳的標準から取捨して三百だけ残したものだ」と云う話も書いてあるが、古代の文物を保存することに熱心な孔子がそんな大鏡を振うとも考え難いのみか、選ばれた三百の中にも道徳的見地からは如何かと思われるものもあつて、史記の話はどうも辯證が合わない。

い。

もつとも孔子が門人を教育するのに「詩」や「書」を利用したことは疑いもなく、従つて教養としての「詩」が倫理や政治の原理を示す様になり、漢の時代には「易」「書」「詩」「禮」「樂」「春秋」など同等の書物をすべて六書と称し、一切の書物の最上位に据える様になつた。殊に年代が降るにつれて、文字や解釈が曖昧になり、之を研究する学者の間にその注解が作られるとともに、その本文は経と称せられて、爾来久しう支那の学術思想の根源をなすに至つた。

漢の初めごろの「詩」の經は二十八巻あつて、大体、秦以来一般に使用されていた隸書で書かれたので、之を今文と云い、更に解釈の相違によって魯・齊・韓の三家に分れていたが、何れも当時の大学の正課と認められていた。別に漢の皇族で学術奨励に努めた河間獻王が保護していた学者の間に毛箋という博士があつて、その人の伝えた「詩」は二十九巻に分たれ、しかも秦以前の古い文字、即ち古文で書かれていたので、かの三家と区別するために、之を「毛詩」と称した。その注釈は三十巻あつて毛詩故訓伝と云い、普通には毛伝の二字、又は伝の一字で呼ぶ、伝とは注釈のことである。

後漢になると、学風が次第に変化して、古文の系統のものが正課として認められ、「詩」に於ても「毛詩」が三家に代つて進出した。殊に鄭玄の如き博大な学者が、毛傳を中心として更に箋注を加えたので、「毛詩」の地位は一層確立された。この鄭氏の箋注をば、普通に鄭箋又は箋と称する。毛詩に於ては、三百余篇の々に就いてその製作されたいわれを書いた文章、即ち序が添えられている。序の筆者は明かでないが、序にも注を加えたのは鄭玄が始めてである。

その後南北朝を通じて、「毛詩」に關し、殊に毛伝鄭箋の中に立て籠つて分析的研究を行つた所謂義疏の学問が流行し、それが唐の初めに孔穎達等の手によつて整理され、かくして毛詩正義四十巻が勅撰本として現れ

るに至つた。元來、毛傳が最初に作られた時は、經とは別々であつたが、読者の不便を除くために、何時しか經伝を一所にした本ができ、箋は更に伝の下に一個条ずつ書き加えられていた。今の經注本が二十巻になつて經伝を一所にした本ができ、箋は更に伝の下に一個条ずつ書き加えられていた。今の經注本が二十巻になつているのも、經伝を併合した際の体裁であろう。毛詩正義も初めは經伝なしに書きおろされた所謂單疏本であるのであるが、宋になつてから經注本と一所にされて所謂經注疏本となり、更に隋の末ごろに出来た陸德明の經典類文をも併せて所謂附疏本となり、宋版の形式として毎半葉十行詰めの附疏本が広く普及され、わが国にも相当輸入された。此を普通に十行本と称する。

伝箋を墨守して「毛詩」を研究すると云う学風は、正義の出現によつて一段落を告げると共に、かくの如き態度にあきたらぬ学者が唐の末から頭をもたげ、遂に宋の朱子に至つて詩集伝八巻を作りあげた。之を新注とか近注とか称するのは、勿論、伝箋に対して云うものである。訓詁に於ては伝箋又は正義に負う所が多いが、序の意見は大体之を否定し、相当自由な思想で見直したために、「詩」に加えられていた道徳的政治的負担がよほど解除され、韻文集と云つた様な姿が認められて来た。

宋から以後は新注の流を汲んだ学者が輩出し、元の劉淇の詩伝通釈二十巻の如きは、朱子の集伝を更に分析研究したものであり、此等の著述を大成したのが明の始めに勅撰された詩集伝大全二十巻である。しかし新注の学派も、末流になると空疏と云う弊病が甚だしく、遂に清朝に至つて伝箋の學問が再び検討されて、經学史の最後を飾つた。

三

昔、わが国の大学に於て漢籍を講習するに就いても、「詩」は毛伝鄭箋を正課とし、博士家の間に其の訓点を伝え、孔穎達の正義が輸入されて後は、更に其の説によつて古点の修正も行われたらしい。殊に「詩」は毛伝と鄭箋とによつて相当訓点の異同を生ずるため、毛伝による訓点をイ点と云い、鄭箋による訓点をケ点と云

つた。イは伝の字の人偏であり、ケは篆の字の竹冠の半分を取ったものである。しかし後醍醐天皇の御世ころから、朱子の新注が輸入されるに至って、博士家に於ても兼ねて新注を講ずる人が現れた。清原良賛の如きは後光嚴・後円融・後小松の三朝に歴仕して侍講の任に当った福平であるが、永和年間には頃湛の礼記集説を御進講申し上げたと云う。礼記集説は元の至治二年に作られた本であるから、わが永和まで僅に五十年を隔つるに過ぎない。

良賢の子を頼季と云い、頼季の子を宗業と云い、宗業の子を良宣改め業忠と云い、業忠の子を宗賢と云い、相繼いで家学を治めたが、宗賢には嗣子がなくト部兼俱の子を養つて家を継がせた。此が「毛詩抄」の撰者たる清原宮賢その人である。

宣賢は法名を宗允と云い、祖父業忠の号をついて環翠軒と称した。若くして少納言明經博士となり、主水正・大炊頭・藏人・直講の官に陞仕し、正三位に陞り、昇殿を許され、侍従に任じ、天文十九年七月十二日、越前の一乘谷に薨じた。年七十六、従二位を贈られた。其の間、後柏原・後奈良二朝の侍読となり、また将軍足利義稙・義晴等の為にも書を講じ、更に能登・若狭・越前までも教化を施したと云う。

その著す所の書は周易抄・易啓蒙通釈抄・尚書抄・毛詩聽塵・毛詩抄・左伝抄・左伝講注・曲礼抄・月令抄・古文孝經抄・大學聽塵・中庸抄・中庸章句童子訓・論語聽塵・孟子抄の多きにのぼり、ほとんど経書の全般に涉っているのを見ても、当代隨一の経師であつたことが想像される。その「抄」と云うのは漢籍仏典などに就いて講説または注釈したもののが名前で、抄物などとも云う、もとより抄録の意味ではない。

宣賞の「毛特」で購する少物の中、私の目睹したもののは左の五種類である。

毛詩聽望（外題詩箋少）二十卷十冊 京都帝國大學図書館蔵

宣賀の自筆本で、文語本で記され、講義の際の手びかえの様に思われる。初めその第一冊だけが久原文庫

に帰していたのを、久原氏から大学に寄贈され、奇しくも延津の台をなしたものであると云う。伏原蔵書
・天師明経儒・宣條などの印がある。其の第一冊には吉田社司某氏の印が捺されている所を見ると、相當
古くから別々に門外に出ていたものらしい。

(二)毛詩抄二十卷十冊 京都帝国大学図書館蔵

口語体で記され、講義を筆記した体裁であるが、往々誤字も認められるので、転写本であろう。然し印は(+)と同様で、伏原家に蔵せられていたものである以上、宣賀講説の時からさほど遠いものとは思われない。殊に巻四には天文八年四月十日の書入れがある。

毛詩抄二十卷二十冊 京都帝国大学図書館蔵

内容は(一)と大体似ているが、(二)に仮名で記されたのを此には漢字に改めた場所もあり、誤脱も少くない。筆跡から見ても時代がやや降る様に思われる。第一巻の末に「右抄者環翠所講、万生私記也、依懇聖令傳書者也」の奥書きがある。印記は一つもない。

毛詩抄零本一冊 京都帝国大学文学部国語学研究室藏

(四)と大体似ていて印記もない。巻一巻二のみを存する。此の本は昭和十二年五月、文学士三ヶ尻浩君の校訂をもって、東京聯文堂から印行されている。

五毛詩抄二十卷十三冊

(二) 読書記録の「(一)」の所に記載したとおり、(二)は(一)の後で購入されたものである。この本は、(一)と同じく、(二)の著者である高木正義の蔵書である。高木正義は、明治時代の文部省官僚で、文部省図書監修官として多くの古文書を収集した。この本は、高木正義の蔵書として、(二)の著者である高木正義の蔵書である。

貴つたことがある、卷一卷二卷四より十まで及び卷十八を欠いていると云う。

「毛詩抄」の内容は、即ち毛詩の講義であって、口語体で筆記されてあるだけ、当年講筵の情形を髣髴せしめるものがあり、ほとんどその人となりまでが想見される。其の依頼したテキストは清原家伝來の経伝を併合した古抄本と、新しく支那から渡った宋版とを折衷したるもの如く、たとえば宋版では周南の樺木の序に「后妃能和諧、衆妾云々」の注があつて、紙文に引かれた崔靈恩の集注に合するが、清原家の家本は集注以外の各本と同じく、その注を欠いていたので、宣賢は「此注は家本に程によまぬぞ」と述べている。経とともに伝義をも訓説していた様子までわかる。

伝義の義理を敷衍するには、勿論、正義を利用している。正義はその引用された文によつて見ても、附錄音十行本を使用していたらしい、しかし、たとえば都風の式微の鄭箋に「式、发声也」と云うについて、宣賢は「是は正義にも式をばよまぬぞ、正義の渡らぬ前の点ぢやぞ、古点をばやぶらぬ程にぞ」と述べているのは、伝統を重んじた博士家の家法である。

その他一般にイ点ケ点の差異を分析したり、大江家の点と対照していることにも、細かい用意が認められる。殊に召南の標有梅の箋に「此夏卿晚」と云うについて、「くれなんとするときにして」と云が江家の点で、同じ物なれ共ぞ、義理だに行は、どちらりともと云はいわれぬ、拍子だにあはゞ、節は何となりとも、と云と同物ぞ、其ならば觀世ぶし、今春ぶし、と云事は有まいぞ」とたしなめたり、同じく標有梅の序に「男女得以及時也」と云うについて、「男はダンと読う事ぢやが、元からこなたにはナンとよむぞ、関東にはダンとよむぞ」と述べて、同じ清原家でも関東と京都との読み癖の相違まで々々に注意しているのは、さすが訓説の形式を固定せしめた家風の現れとして、今日から見ても興味が深い。

伝義または正義の説で意に満たぬ場合には、隨處に朱子の説や劉瑾の詩伝通釈または大全などを引用してい

るのは正しく良賀以来の進歩的態度に外ならず、都風の君子偕老の「繼絆」の一字に家に伝わる説をも引用して「絆を祖父ぢや者が申たは、半と云心ぞ、あつさが半分オリになつたぞ、見処があつてこそ申つらう、正義にはない、何に有らう見当り候ぬぞ」と述べているのは、一面、一字一句も忽にしない謹慎さを示したもので、かくてこそ一代の宗師として泰山の重きをなしたのふ宜なるかなと思われる。

四

故に「毛詩抄」を校訂するに際し、その本文は筆写の便宜上、龍谷大学図書館蔵の木活字本を底本とし、上述數種の抄本を以て之を校定した、以上は主として高馬君の努力によつた。

しかし、その本文は、いわば正義に於ける单疏本の如く、経伝を具載していないため、讀者には極めて不便である。そこで専ら小川君に嘱し、京都帝国大学図書館蔵の伏原家旧藏古活字本によつて先ず経の全文を掲げた。もつとも清原家の家本と活字本との間に、字句の異同があつて、底本に墨筆を用いて改竄増刪されたところのある場合は、改められた方の結果に従つた。次にこの本に施された伏原家（即ち清原家）相伝の旁訓および古止点・雁点などによって国語に読み下した訳文を経の次に補つた。伝義に至つては、その事が容易でないのと、「抄」の文と必ずしも関係せぬものもあるので、暫く之を略し、特に伝義の全文なくしては「抄」の意味の通じない場合に限り、各篇の最後に附録して参考に便した。東京静嘉堂文庫に蔵する宣賢手抄の毛詩伝義はかかる際の絶好な資料であるが、地理的の關係から十二分に利用することができなかつた。しかし、小川君は曾て上京に際し特に静嘉堂に赴き、かねて疑問の点を調査されたから、古活字本の訓点の遺漏も相当訂正されていると信する。

「抄」に用いられた国語は、国語史の資料として絶好のものと称せられるだけあって、私たちには相当難解なものが多く、しばしば文字土池上楨造・三ヶ尻浩両君の教示を煩した。将来此の校訂本が国語学界に貢献す

ることを期待するとともに、国語学者によつて今一度厳密に校訂されることを望んで已まない。抄物の歴史や清原家の学問などに就ては、足利行述氏の「鎌倉室町時代之儒教」、三ヶ尻君の「校訂毛詩抄解題」・「漢文和訳の歴史より見たる室町時代の抄物について」の諸書を参考した。特に今は亡き出雲路通次郎先生にも親しく御指教を仰いだことは何より忘れ難き思い出である。

最後に此等の貴重なる底本の利用につき十二分の便宜を与えられたる京都帝国大学図書館・龍谷大学図書館に対し、深き感謝の意を表し、特に龍谷大学教授高雄義堅氏の斡旋に負う所が多いことを記念したい。此の事業はなお其の續に就いたに過ぎない、将来とも一層の御援助を仰いで、その完成の一日も遠ならんことを祈るものである。昭和十五年二月八日。

以上は、清原宣賢（一四七五—一五五〇）の抄物「毛詩抄」二十巻、すなわち「詩經」の講義録、の寛永ころの木活字本（龍谷大学図書館蔵）を底本にして、数種の写本をもつて校定した成稿が、「岩波文庫」に活字となつて収められたとき、その書の第一分冊に冠せられた先生の解題である。この「文庫」は、第二分冊の「毛詩卷第十一」、小雅の南有嘉魚之什、「吉日」の詩の部分まで出版されて、後半の十巻は未刊のままになつてしまつてゐる。

以上は、いずれも先生の京大在任中の、今ではほとんど忘却されてしまつてゐる、支那学の業績、伝統的には経学とよぶものの、一部分である。ちなみに、中国文獻学は、現在の中国にあつても緊要な問題であつて、文献調査と古籍讃解にかんしては、膨大な出土文物の整理とならんで、その事従者の養成を急務としている。たとえば『医古文基盤』（一九八〇・八、人民衛生出版社）などは、古典語で書かれた中医書の、讃解にかんする文献学の基礎知識を紹介するものであつて、あたかも倉石先生の支那学研究法のノートを読むおもいがする。

三

ところで、一九四九昭和二十四年、東大教授の専任となつて東京に居を移された先生は、ときに日本学術会議の第一期会員に選出されていた。

戦後、中国研究に從事する者の参加する総合的な学会として、日本中國学会・中國語学会・現代中國学会、ないしは東方学会などが数えられる。戦前いわゆる漢学・支那学と称し、現在は中国文学・中国哲学の学科を専攻してきた研究者が属する、もつとも主要な学会は、なかでも日本中国学会である。その創立から三十三年にあたるが、もはやその草創期の様子を知るひとは、いまやごく稀である。昨年、東大で日本中国学会第三十二回大会が開かれた際、その名譽会員の福井康順氏と池田末利理事長から、学会設立に尽力された学術会議会員当時の倉石武四郎氏のことを記しどもよく勧められた。たまたま、これにかんする先生みずからメモがみつかつたので、それを左に転写しておくこととする。「中國語学研究会（関西）月報二十五年一月」（一九五〇・一、大阪外國語大・中國語学研究室）に油印されたもの。

日本中國学会はどうしてできたか

題

日本学術会議が昨年（一九四九昭和二十四年）一月、はじめて成立したとき、その第一部会（広い意味の文学）で、今後どういうことをするかといふことが問題になつた。

解

わたくしは、その席で科学研究費の公正な配分こそ最も緊急な問題で、もしこれが從来と大差ないようなら、学術会議は直ちに鼎の輕重を問われるであろうとまで極言した。幸いに全体の会議でも、いちどあつたら、学術会議は直ちに鼎の軽重を問われるであろうとまで極言した。幸いに全体の会議でも、いち

447

早く科学研究費等配分に関する委員会が作られ、その案にもとづいて文部省に昭和二十四年度科学研究費等審議会が設けられ、第一乃至第四の審査会が審査を行なつたわけである。

しかし、たゞいま第一審査会所管の狹義の科学研究費についてみてても、広汎な研究題目と多数の研究者について、少數の審査員が判定をくだすことは不可能でもあり、結局一応かなり細かい分野に分けてそれぞれの学界の意見をきき、それを更に総合検討することになり、わたくしは、中国文学（語学・哲学をふくめた広い意味）の分野について学界の意見をきく責任を負わされた。ところが、この分野にはまだ全国的な学会が設けてないので、やむなくわたくし個人の判断で、全国の中国学界を代表すると思われる方々に手紙を出して、その協力を求めた。しかし審査の期日が切迫していただめ、せつかくの企てもわずかの方の出席と書類による意見などがあつたのみで、予期した効果をあげることができなかつたのは遺憾の上もないことであつた。

そこでせめては、来たる昭和二十五年度にそうした失敗を繰りかえさぬようにと考え、これには早くから準備して全国的学会を作るほかないことであるから、全国の有志の方にも務めて連絡したが、特に地理的な便宜から東京在住の有志が進んでその世話人といふふどうな仕事を引き受けられた。もとより全国的学会の主要な目的はこれに限ることなく、むしろ学会の連絡によつて学問研究を促進する点にあるので、わたくしが学会議会員として働きかけたのも、つまり学会を生み出す動機に過ぎないといって好いわけである。

そして、世話人がたの努力により、昨年十月、東京において第一回研究発表会が開かれ、その機会にまぎなりにも、理事・評議員をえらび（最初のこと）で任期一年とし、理事長は互選によって加藤常賢氏にきまつた、学会としての面目だけはできたことになる。しかし、何といつても東京在住者には地方の事情がよく分からず、まだ全然財政的援助もなかつたため、その趣旨をあまねく徹底させることは困難で、随分ふゆきどきであつたことは率直に認めてよいと思う。そこでこれからは、全国各地の理事・評議員たちが手わけして、

会の趣旨を徹底させ、一人でも多く入会していただくように努力することを申しあわせたが、各地区といつても広いことであり、またそうちした費用を支出しない現状では十分に活動されることもむつかしいと思うし、すでに入会された方の会員名簿がなくては、誰に勧誘しても分かるずにさぞ困られたことと、つづくお察しする。

そういうする中に、二十五年度の科学研究費審査の期日も近づき、二十四年度の科学研究費の研究成果刊行費（第四審査会所管）から、日本中国学会誌への補助ができることもきまつた。話は前にもどるが、十月の大会で、わたくしから提案して、二十五年度科学研究費に対する学会としての審査員（これを科学研究費審査に關する専門委員と呼んだ）を公選することが承認され、学会誌の原稿の審査員もこの人たちに兼ねてもらうことになった。会員名簿は、その目的に促されて専門委員投票用紙と一緒に配付され、投票は今年（昭和二十五年）一月二十日に開票され、十五人の専門委員ができた。そして予て公募しておいた学会誌原稿の、第一回審査会が一月四日に開かれたわけである。

科学研究費の正式の審査員は、学術會議の推薦により昭和二十五年度もわたくしに定まつたので、おそらく三月下旬には、この専門委員がたにお集まり願つて、学会としての意見をまとめて頂けるものと考えている。何といつても始めての企てであり、特に一般に周知させるには極めて不便な時勢でもあって、たまたまご存じのなかつた方からは越権だといふ叱りも受けているが、主旨と経過とは以上の通りであるから、従来の行きがかりはともかく、一人でも多く入会してくれば、自然みなさうがたの主張も通つてゆく」と信する。

なお、入会のお申しこみは、東京都文京区本郷局区内、湯島二丁目一番地、湯島聖堂内、日本中国学会（振替 東京八九九一七）へお願ひいたしたく、会費は年一百円、会員には学会誌（年報）を無代配付する。第二回研究発表会は、來たる十月ごろ、京都で開かれる見こみ。

最後に、たとえば東京大学支那学会など、ある機関や地方関係の会も、中国語学研究会など、ある専門の会も、すべてこの日本中国学会と共存共栄するというのが主旨で、つまり学会の統合は全然考へず、日本中国学会の入会はすべて個人の資格と自由意志とで行われていて。ただ将来、たとえば中国語学研究会などが全国的組織を持つて活動を始めたとき、日本中国学会はどういう関係に立つかということは、まだ何も定まっていない。わたくし個人の考えでは、たとえば中国語学研究会誌の出版について、科学研究費の補助を申請することもできようし、科学研究費の審査員についても、理論的に言えば中国語学研究会も選出母胎の一つになつてかまわないと思っている。

なお、今度の投票によつてできた専門委員は、

阿部吉雄 宇野精一 奥野信太郎 小川環樹 加藤常賀 木村英一 倉石武四郎 楠本正継 重沢俊郎
斯波六郎 竹田復 手塚良道 福井康順 麒保孝 吉川幸次郎

の諸氏である。

文部省科学研究費補助金の交付とその審議にかんして、その公正を期す必要から全国的な学会の設立が要請されたこと。そして、その日本中国学会の専門委員会が、この科学研究費交付の審議に参与する責任を負ひ、あわせて学会誌の原稿審査を兼ねるようになつた経緯について、ここには明らかにされている。『日本中国学会報』にも、創立事情の記事を欠いたままになつてゐるところから、ここに転載するしたいである。

倉石先生がみずから創設され、最晩年までその会長であった、中国語学研究会（現、中国語学会）のことについては、機関誌『中国語学』がその発足の当初から刊行されてもおり、また先生の『中国語五十年』にその事情は詳しい。

四

さて、倉石武四郎先生が、わが国の社会にもたらした最大の功勞は、もちろん中国語教育の推進にある。大学教授としてアカデミズムの世界において果たしたその役割とは、同日に論じられないものがある。これは、今さらながら鉛記しておかなければならぬ事がらである。

『支那語 発音篇』（一九三八・五）『同語法篇』『同讀本』『同翻訳篇』や『倉石中等支那語』五巻（一九三九・三一九四一・三）から、戦後の「ラテン化新文字による中国語初級教本」のうちの『ローマ字中国語 初級』（一九五八・四）や「中国語のくみだせ」のうちの『ローマ字中国語 語法』（一九六九・一一）など、の教科書を精力的に編纂され、その一方で中国語普及のための事業を、『支那語教育の理論と実際』（一九四一・三、岩波書店）から『中国語五十年』（岩波新書、一九七三・一）に至るがたちで、書物に取りまとめてこられた。ひろく反響を呼んだこれらの書は、いまもわが国において中国語の語学教育にたずさわるものにとって、ひとつの大好きな指針となつてゐるものである。それは、日本語が、漢字カナまじり文をもつてその表記法としているかぎり、漢字語のもつ字義・語義をたえず中国語のそれとのかかわり合いにおいて細心の注意を払いつつ、語学学習をつけなければならないことを指摘している。外国語としての中国語は、日本語の漢字・漢文との正しい関係を見きわめて、教授され學習されなければならない。この点、中国古典と日本漢学にふかい造詣をもち、わが国の国語・国字問題に誠実に対処されてきた先生にして、はじめて主唱しうるところの、漢字文化圏における独自の中国語教育をみずから体験を通して樂いてこられたのである。

そして、後半生を日中学院の学長として、その經營に尽瘁せられたことについては、先生の没後、同学院の

編んだ『中国へかける橋』（一九七七・四、亜紀書房）が、なによりも正確に実情を伝えて、余すところがない。わが国の中国語教育史のうえで果たされた先生の業績については、みずから繰りかえし語られる機会があつたから、いまここで更めてまとめる必要はなかろう。筆者は、倉石中国語講習会・日中学院をつうじて、七年半の講師をつとめたこともあるて、とりわけ『中国へかける橋』に感銘をおぼえる。

ところで、このたび「くろしお出版」から、このようなかたちで、倉石先生の著作集が世に出ることになったのは、同出版の岡野ゆみ子氏の要請によるものであり、筆者が頼惟勤氏にお勧めして、両名でお世話をすることになった。編集に際しては、日中学院講師であった高橋均・中原誠子の両氏にもご意見をうかがつた。富山大学の佐藤進・相原茂の両氏には、原稿の校閲、校正などの編集業務を授けていただいた。ともども厚く謝意を表する。参考までに、倉石先生を記念したこれまでの出版物については、まず、東大中国文学研究室編『倉石博士遺稿 記念 中国の名著』（一九六一・一〇、動草書房）がある。「詩経」から「実践論」までの五三種の中国の著作物を、五三人が分担執筆して紹介している。古稀の記念としては、中国語学研究会編『中国語学新辞典』（一九六九・一〇、光生館）が刊行された。一九人の執筆による小項目の語学辞典であった。そしてさきに挙げた、遺稿集の意味をこめた『中国へかける橋』がある。日中学院倉石武四郎先生遺稿集編集委員会の編集。ただし、今回のように、先生の文章を集めてまとめたものは、はじめての企てである。今後も、ひらく読者の支持をえて、先生の講義ノート類の一日もはやく公刊されることを願ってやまない。一九八一辛酉、一月三十一日。

倉石武四郎著作集 第一巻
ことばと思惟と社会

1981年3月31日 第1刷発行

定価 5,000円

著者 倉石武四郎
発行所 くろしお出版
101 東京都千代田区神田小川町3-24
でんわ 03-291-3557
ふりがえ 東京9-31301
印刷 早稲田大学印刷所・共立社印刷所
製本 大洋社